

対面+オンライン→「ハイブリッドな授業」は令和時代のスタンダード

普段づかいのハイブリッドな授業

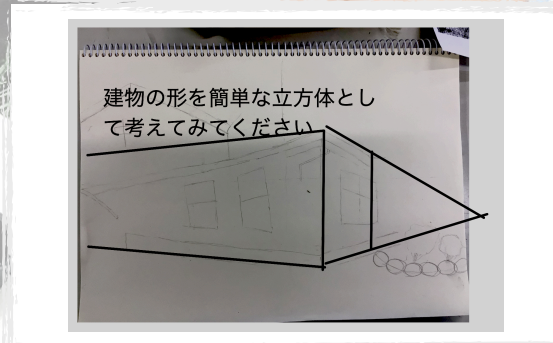
いまや「遠隔授業」は、特別な実践ではなくなりました。コロナ禍だからの実践でもなくなりました。気軽に授業の中で行うものになってきています。

ここでは、高遠高校芸術コース美術専攻の生徒と高遠中学校の生徒が行った「オンライン授業」の実践を紹介しましょう。左下の分類では、B「教科の学びを深める遠隔教育」、右図では「非同期」「双方向」に当てはまる実践です。

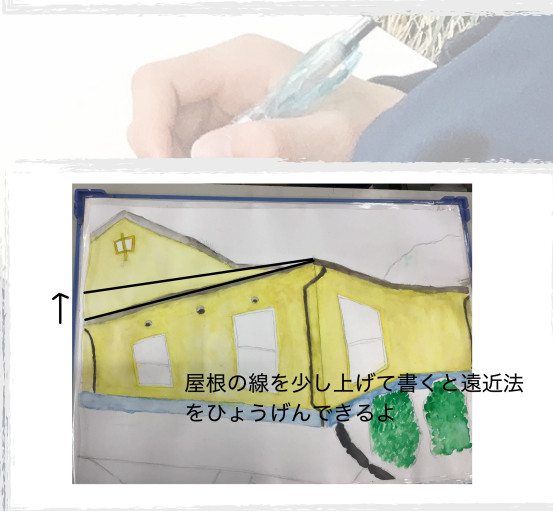


①中学生は、校内写生会の場所決めのために写真を撮り、ラフスケッチを行いました。制作途中の作品をきりのよいところで撮影しschoolTaktに貼り付けます。これに対して、高遠高校芸術コース美術専攻の生徒がアドバイスします。

②高校生は高校の授業時間に、school Taktの画像を確認し、授業の目的にそって中学生にアドバイスをっていきます。左の写真と右図の中学生のスケッチに書き込みを行い「構図」についての解説をしてschool Taktにて返します。生徒の作品に直接、書き込むことはICTでなければできない方法です。



③さらに、写生会で描いた作品に対してどのように修正していったらいいかのアドバイスも同時に行いました。高校生が何度も訪問することなく指導が行えるのは非同期遠隔学習の利点でもあります。高校生からのアドバイスを手がかりに自分の作品を見返し、考えを広めつつ取り組む対話的で深い学びにつながっています。



高遠中学校 美術 小長谷結夏先生の実践をもとに推進センターで編集させていただきました。

	非同期	同期
一方向	<p>特定・不特定多数に一方的に教材を送る。受け手は自分で設定した時間にいつでも見ることができる。送り手には誰が見たかわからない。</p>	<p>送り手と受け手は同時にやりとりする。講義が主の場合は一方になる。</p>
双方向	<p>特定の児童生徒に教材を送る。受け手は自分で設定した時間にいつでも見ることができる。教材を通してやりとりができる。</p>	<p>送り手と受け手は同時にやりとりする。チャットにより即時に意見を伝えることもできるが慣れが必要。さらにschoolTaktと併用して協働学習もできる。</p>

遠隔授業では授業の目的にあった接続方法を選択します

コロナ禍でのオンライン授業では上記の4つのパターンの中で取り組みやすいところからはじめました。ハイブリッド型のオンライン授業では、「授業の目的」にあわせて選択することが大切です。写生会の実践では中学生がラフスケッチを行った後のアドバイスが大切になりますので、中学生の活動と高校生の活動は同時に行わない方が効率的であることから「非同期」を選択しています。しかし、話し合いをしたり指導を受けながら学習を進める場合には「同期」「双方向」が有効です。この時に児童生徒の考えを書いたものが必要となる場合には「Zoom」に加えて「SchoolTakt」を併用することも考えられます。また、遠隔教育を継続・充実させるために、可能であれば直接交流を行うことも大切になります。伊那市の学校間の直接交流とオンライン授業を併用することで遠隔教育を充実させてきました。対面とオンラインのハイブリッドな授業を日常の中で実現させてきました。これまでは実証授業として行ってきていました。今後は、普段づかいの授業の中でハイブリッドな授業を構想することも可能になると考えられます。

- A** 多様な人々とのつながりを実現する遠隔教育
他の学校とつないで合同で授業を行うことで、協働して学習に取り組んだり、多様な意見や考えに触れたりする機会の充実を図ります。
- B** 教科等の学びを深める遠隔教育
遠方にいる講師が参加して授業を支援することで、自校だけでは実施しにくい専門性の高い教育を行います。
- C** 個々の児童生徒の状況に応じた遠隔教育
特別な配慮を必要とする児童生徒や、特別な才能をもつ児童生徒に対して、遠方にいる教員等が支援することで、それぞれの状況に合わせたきめ細かい支援を行います。また、一人一人の児童生徒がそれぞれ教員等とつながることで、それぞれの興味関心に寄り添った指導を行います。
- D** 家庭学習を支援する遠隔・オンライン学習
感染症や災害等の非常時においても、家庭と学校をつないで学習支援を行うことで、児童生徒が学習する機会を保障します。
- E** 遠隔教員研修
教員研修をオンラインで実施することで、教員の負担軽減や業務効率化を行います。
遠隔教育の分類（遠隔教育システム活用ガイドブック 第3版）より

遠隔教育を実施する目的や接続する相手を意識してみましょう

